

ケアを描く

育児と介護の現代小説

3・31刊 四六判256頁 本体2000円

七月社

文学研究とケア理論の交差は「役に立つ」か

多様な人間関係と価値観の構想を探る論集

泉谷 瞬

「ケア」とは、要するに「世話をする」ことである。たとえば肉親の介護・看護であったり、育児であったり、あるいは他人を「気遣う」ことであつたりと、日常的な生活形態において認められる人々の行為および関係性を指す。近年では社会学や政治学研究の領域において「ケアの倫理」として重視され、現代の新自由主義体制への批判的視座に据えられる機会も多くなつた。

ここで注意すべきなのは、そうした研究動向におけるケアが、自己責任・自助努力の風潮を見直し、「他人を思いやる心を持ちなさい」といった単純な道徳的呼びかけに収まるような理論では、もちろんないということである。従来の近代社会が想定する人間像は、公的空間の中で自立した振る舞いを行う主体であつた。これに対して、他人からの世話を必要とすることは、

自立していない「依存」的な主体——極端な表現をすれば、「役に立たない」存在と見なされる事態に繋がる。

しかし出生の時をはじめとして、様々なライフステージに応じた質のケアを受ける可能性が誰にとつてもあり得ることを考慮するならば、むしろ人間の生とは、濃淡はあれどもその全般において「依存」的な状態に晒されていると言えよう。すなわち、自立的主体を社会の基準に置く価値観を転換し、「依存」という文脈に纏わりつく否定的な側面を解体するとともに、ケア理論の重要な意義が存在するものである。

本書は、この「ケア」をキーワードとして文学作品を読解することで、自立の主体を所与の基点とする現行の社会体制を相対化し、多様な人間関係と価値観の構想を探る論集である。ケア役割がジェンダー構造と密接に絡み合つて

いることを暴き出す媒体として、現代女性作家による小説に焦点を当てた点に特徴がある。以下、各章の要点を述べていく（なお、これらの論考以外には、映画やマンガ作品を取り扱ったコラムも多数収録されている）。

第一章「母親になろう」とする母子たちの物語——角田光代『八日目の蟬』（光石亜由美）は、近代国家が女性へ要請する「産む身体」が導き出す女性間の階層と規範を批判的に捉えつつ、「母親であること」と「母親になること」の実相と過程について、育児をめぐるケア行為から浮き彫りにする。

第二章「ケア小説としての可能性——三浦しをん『まほろ駅前多田便利軒』（米村みゆき）は、主人公が営む「便利屋」という職業と物語の舞台である郊外都市の性質に着目し、そこより「郊外」における紋切りの型とは異なる様々な親子関係と人々の遭遇を抽出している。

第三章「弱さと幼さと未熟さと——辻村深月『君本家の誘拐』（冷たい校舎の時は止まる）』（古川裕佳）は、辻村作品が抱える一つの傾向に親以外のケア行為者（中間的存在）が幾度も登場する点を指摘し、「育児」を家族内部の営みに限定しないことの期待を論じる。

第四章「家政婦が語るシン・グルマサー物語——小川洋子『博士の愛した数式』（佐々木亜紀子）では、作家的であることを隠そうとしない作品の不自然な「語り」を分析し、ケアにまつわる過酷な現実を「物語」によって乗り越える戦略性を看取する。

第五章「ケアと結婚と国際見合い——楊逸ワニちゃん『金魚生活』（尹芷芳）は、「国際結婚」と「ケアの連鎖」を論の中心に置きながらも、国同士の経済格差といった表面的に目立つテーマのみならず、同一とされる国内における階層や生活様式の差に関しても目配りを怠らない。また、人間相互の言語的行為が、ケアに携わる人々の主体性を構成する要素として不可分なものであるという問題提起は、文学研究の観点からケアの問題に切り込む本書の姿勢と理想的な形で照応している。

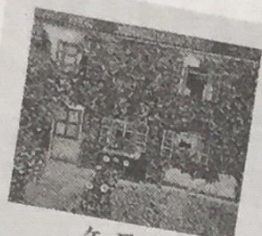
第六章「ディストピアの闇闇を照らす子ども——多和田葉子『献灯使』（磯村美保子）は、原発事故後に「鎖国」が進み、生命の仕組みや社会の常識が反転してしまった表題作を基に、破壊的な出来事が皮肉にも招いてみせる「新しいケアのあり方」を模索する。

第七章「新しい幸福を発見する——鹿島田真希『冥土めぐり』（飯田祐子）は、鹿島田作品の評価に多く見られる「聖なる愚者」の分析軸をいったん宙吊りにし、ケアの観

点を徹底させることで、常識的な枠組みからは「不幸」と判断されてしまう現実状況を一転させる物語の効用を強調している。いずれの論にも通底しているのは、文学作品と向き合うことによって、ケア理論の進展を図る点である。

しかしこれまでの紹介を辿ったとしても、所詮はフィクションである文学作品など、ケアの現場に對峙する人々にとっていったい何の役に立つのか、という疑問は残るかもしれない。「役に立つ／立たない」の基準であらゆる物事を振り分ける議論の是非はさておき、あえてその問いを受けたとしても結論はシンプルだ。身体的な人間の実感から、抽象性に満ちた葛藤までを描くことのできる文学が、役に立たないはずがない。その端的な事実を見誤ることこそが、最も「役に立たない」のである。

文学研究とケア理論の交差とは、目指すべきケアの思想を実現させる「素材」として文学を利用することでも、ケアにまつわる現実の困難な「反映」として文学を例示することのどちらでもない。それは、ケア概念の輪郭に對する私たちの固定観念を作品が変容させる瞬間を逃さず、そのためだけに言語能力を使い切ることを意味するだろう。（大谷大学文学部任期制講師）



ケアを描く
育児と介護の現代小説

佐々木亜紀子・光石亜由美・米村みゆき 編
本書は、この「ケア」をキーワードとして文学作品を読解することで、自立の主体を所与の基点とする現行の社会体制を相対化し、多様な人間関係と価値観の構想を探る論集である。ケア役割がジェンダー構造と密接に絡み合つて